

## ま え が き

日本の留学生センターは進化の時期を迎え始めたようだ。

国際交流センターに衣替えという案もあるとか。人的資源として大学院で活用することも始まっている。

とりわけ東アジアからの留学生の数が増え、日韓の理工系留学生や世銀などの政策的留学生、シンガポールのツイン・プログラム、その他と留学生の種類が多様化し、センターの対応も多様・複雑になる。国益から留学生事業に対する期待も大きい。留学生センターはどのように進化すれば最適なのか。

センター長はひとつの鍵を握るポストである。現在は学部の持ち回りで二年任期となっているが、一つに二年はやや短い。三年くらいは必要ではないだろうか。それに留学生センターの教官もローテーションに加わるべきだろう。歴代、外部の者ばかりであるのはどうなのだろう。

BBCニュースの画面にインドの国会のひとシーンが映し出された。首相が英語で説明している。これを見てひとは何を思うか。宗主国の浸食を思わないか。無惨と感じるのはおかしいか。言葉は民族と文化の同一性の砦である。

英語が世界の共通語ということが進めば、キャンパスや街角、会社の中で似た情景が見られるようになる。

郷に入っては郷に従え。これは外国語についてもあてはまる。日本に来たら日本語を話しするのが原則と考えたい。外国へ行けばその国の言葉を話す。これあってこそ外国語を学ぶ喜びも日本語を教える意気込みも生まれる。異なる言葉を学ぶとは、自国の文明にもう一つ異なる豊かなものを付け加えることである。外国語を学ぶとは異なる文化が出会うところで不可避免的に生じる本来喜ばしい現象と考えたい。去るにあたり留学生センターの日本語教育と本紀要の論文に敬意を表する。

横浜国立大学 留学生センター長  
岩 切 正 介